

アジア平和貢献センター共催シンポジウム 国際社会の中で「国」という枠組みは今後どうなっていくのか

基調報告1

未承認国家から考える
これからの「国家」

慶應義塾大学総合政策学部
准教授

廣瀬 陽子
ひろせ ようこ



基調報告3

アジア力の世紀をどう
生き抜くか
——Gゼロの時代を超える
日本外交の道

筑波大学名誉教授

進藤 榮一
しんどう えいいち



基調報告2

ASEAN/ASEAN
諸国が目指すことから
何を学ぶか

東京理科大学工学部教授

大庭 三枝
おおば みえ



柴生田 それでは開会いたします。（拍手）
本日は、アジア平和貢献センターとの3回目
の共催のシンポジウムでございます。

最近のウクライナの情勢、それからさまざま
なアジアでの問題を見ておきますと、国家の枠
組みというものがこれからどうなるかというこ
ろにたいへん大きな関心が集まっていると思
われます。戦後の秩序がちよっと崩れてきて、
紛争が絶えないわけですけれども、その背景に
あるもの、それからこれから世界がどう変わっ
ていくかということについてお話をしていただ
きたいと思います。

問題提起

皆さんよくご存じかもしれませんが、
経済倶楽部は1931年、満州事変の年に誕生
いたしました。石橋湛山は当時、言論弾圧があ

る中、この倶楽部の活動を通じて言論の砦とし
て守っていかうとしたわけですが、その背景に
は日本が満州に進出し、領土あるいは権益の拡
大を通じて国力を高めるという方向へ行ったこ
とがありました。そのときこの倶楽部も、東洋
経済新報社も、海外の権益を捨ててアジアの平
和国家として自立することが日本の発展につな
がるとの論陣を張りました。それは主義や考え
方を超えて、われわれはアジアの国家ですから、
アジアの平和のうえに国家の基盤が成り立つと
いうことを考えたわけで、それは戦後もまった
く変わっていないと思います。

現在、日本は中国、台湾、韓国、さまざま
なところとかかわっているわけですが、残念なが
ら国民感情の中にそういった確固とした信念が